

CONTENTS

▼コラム

・これも土木 第1回 お城における土木の話(1) : 大友正晴

▼フォーラムから

・地域福祉の目線で考える地区防災 ～自然と不自然…ムリとムダのない防災を目指して～ : 吉田千春

▼フレンズコーナー

・奥村組のESG/SDGsへの取り組み～働き方改革の推進、ダイバーシティ経営の推進、地域社会との連携～ : 山下智

▼事務局通信

シビルNPO連携プラットフォーム/since2014

CNCP通信

VOL.111/2023.7.5

■今月の土木■



女性活躍推進への取り組み(けんせつ小町工事チーム)



工事所の「仮囲い」への掲示 障がい者の自立支援(アート作品)

■ESG/SDGsへの取り組み～働き方改革の推進、ダイバーシティ経営の推進、地域社会との連携～

当社グループは、「安全で働きがいのある環境を確保し、個性・創造性を大切にする企業風土を醸成する」、「地域社会との良好な関係の構築と維持に努め、豊かな社会の形成に貢献する」を企業行動規範に掲げ、ESG/SDGsに関わる取り組みを戦略的に推進しています。本稿では、「働き方改革の推進」、「ダイバーシティ経営の推進」、「地域社会・企業との連携」についての事例をご紹介します。(株式会社奥村組:山下智)

<https://www.okumuragumi.co.jp/environment/about/>

▼フレンズコーナーに続く。

●今月のフレンズは、CNCPの賛助会員です。



▼フォーラムから

これも土木 第1回
お城における土木の話（1）

アジア航測株式会社 事業推進本部
社会インフラマネジメント事業部
大友 正晴



昨今、お城ブームが起きていることをご存じでしょうか。「レキシヨ」や大河ドラマの「真田丸」「西郷どん」のヒットなどからだそうです。お城と言えば天守閣が象徴的建造物として人気が高いと思います。しかし天守閣は建築物です。では、お城の中の土木についてお話ししたいと思います。



はじめに

お城は天守閣ばかりではありません。お城には、城主やその家族などが住んでいた御殿、蔵や門、櫓、塀などの建物、そして石垣、橋、濠などがあります。そして、これらを配置することを縄張りと言います。このように、お城は様々なパーツで構成された軍事施設であります。

そのお城の構築には建築と土木の技術が駆使されています。江戸時代前後には、建築物の構築を「作事」と呼ばれ、土木工事のことは「普請」と呼ばれていました。

◆作事と普請

古くは禅宗の寺で多くの人々により堂塔の建築することや道・橋・水路・堤防の建設など土木工事を総じて普請と言っていました。室町時代頃から、建築は作事、土木は普請と分けて言われていたようですが、江戸末期頃には、作事と普請の差異があいまいとなっていたようです。今では、家を建築することを普請と言っていますね。

■ お城における土木「普請」

城における土木構造物としては、縄張り、曲輪（郭）、濠・堀、橋、門（虎口）・櫓形・馬出、土塁・石垣、堀切・切岸・豎堀などがあります。これらを構築することが普請です。

NHK の大河ドラマで長年にわたり建築考証をされていた平井聖氏監修の「日本の城を復元する」の中で、近世の城郭建設の流れ（右図）が説明されています。地選で大まかな建設エリアを決めて、地取で具体的な築城場所を選定、縄張で本丸や二の丸などの配置、城の形状を決めます。そして普請で堀や、土塁、石垣などを構築します。最後に作事で天守や御殿、櫓、門などを建築します。

■ 縄張り

城の縄張りとは、城の平面及び諸施設の配置計画のことです。動物のテリトリーを意味する縄張りとは異なり、お城の本丸を何処に置くとか、二の丸などの郭の配置や、防御施設としての堀や土塁をどのように囲むか、出入り口（虎口と言います）の位置・形状をどうするかなどを計画・設計することを縄張りと呼んでいます。

ところで、中世の頃の城は山に構築されることが多くありました（これを山城と言います）。やがて山城から平山城、平城と山から里にも城が構築されるようになりました。したがって、山城と平城との縄張りにも大きく異なるものがあります。基本的に城は地形に沿って構築していきますが、山城の縄張りには地形による制約が大きく影響されます。一方、平城の場合には、地形とくに川・湖沼や海岸の影響はあるものの山城に比べて地形に拘らない縄張りが可能となります。江戸城の外濠では、現在の水道橋から昌平橋間でもともと山だったところを掘削するなどの大規模な普請も行われています。

まずは山城の縄張りについて説明します。

地選

地取

縄張(経始)

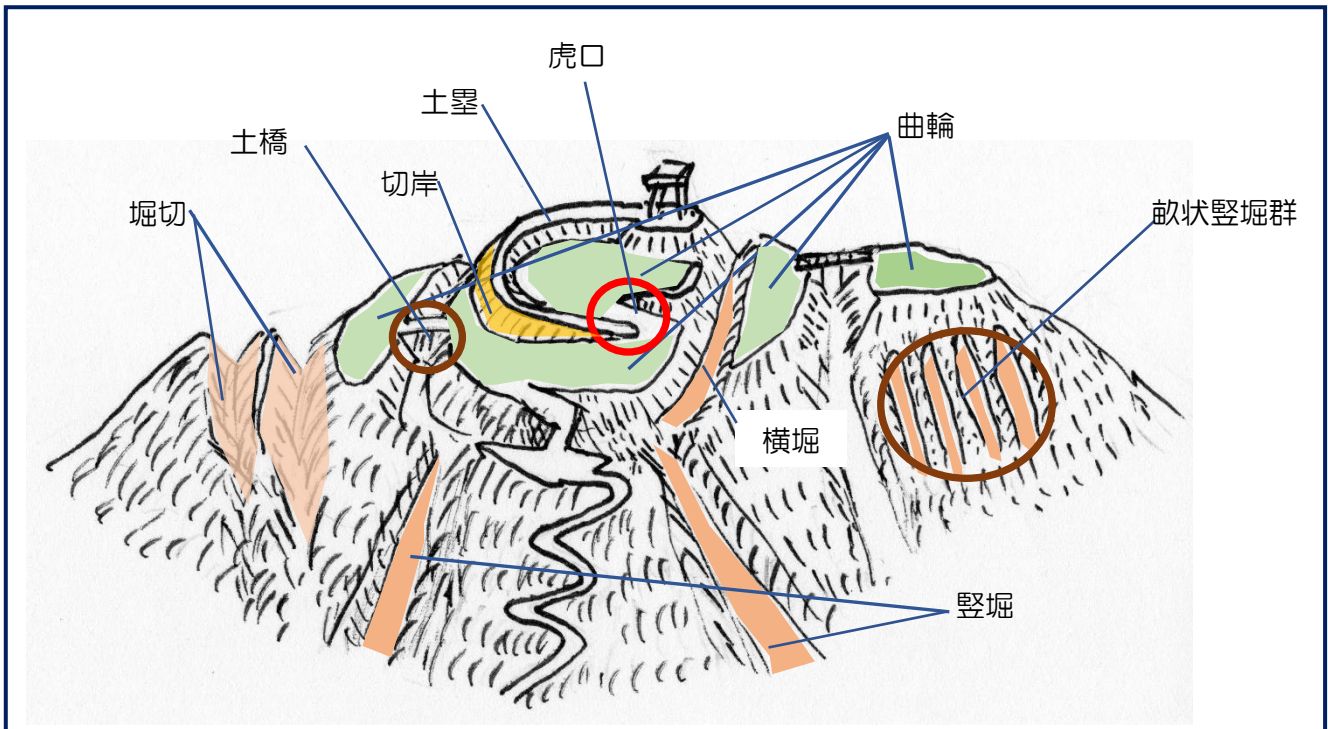
普請

作事

完成

■ 山城の縄張り

山城は、急峻な山岳地形を利用した城で、攻めるに難しく、守るに堅い構造をしています。そうは言っても、兵が滞在するためには、平地（曲輪）も必要です。この曲輪を整えることを削平と言います。山の頂上や尾根などを削平して曲輪が構築されます。また、曲輪と曲輪を結ぶのに橋を設けます。当時は、木橋を架けるか土橋と言って土で造った橋で連絡できるようになっています。その他山城のパーツには、防御のために土を盛った土塁、斜面を急にする切岸、尾根からの敵の侵入を防ぐための堀切、攻め手の横への移動を防ぐために山腹斜面に縦堀（斜面に沿って縦に堀を設けます）、縦堀を連続して設ける畝状縦堀群、斜面の同じ高さ付近に掘り下げる横堀があります。曲輪の入り口は虎口と言って防御の要となるので、侵入されにくいように喰い違いするなど工夫することもあります。（下図参照）



これらはすべて普請、つまり土木により構築されるものです。これらに、簡単な柵や塀を設置したり、門を構えたりすると城らしくなります。さらに、曲輪に天守や御殿を建てたり、櫓や狭間を設けた塀、櫓門、石垣などを構築すると、伊予松山城（下の写真参照）のような近世の山城となります。



次回は、平城の縄張りについてお話しします。

▼フォーラムから

地域福祉の目線で考える地区防災

～自然と不自然...ムリとムダのない防災を目指して～

気仙沼おとひめ会 代表
 気仙沼市 地域福祉計画推進委員
 気仙沼市 大浦地区自治会 女性部長
吉田 千春



■東日本大震災から 12 年。人間が建設した自然と不自然を分ける壁「防潮堤」

三陸沿岸部には、東日本大震災以降、高いコンクリートの壁「防潮堤」が建設されつづけています。海と陸を分ける壁は「自然」と「不自然」を隔てる壁。防潮堤が建設され、防災集団移転で山が削られて以降海の中、動物たちとの共生環境に変化が生じていると感じています。地球温暖化による海水温度の上昇、気候変動によるものだと言われれば、エビデンスのないわたしの肌感覚にすぎないことになりませんが、目で見て、耳で聞いて、肌で感じていることは深刻さを増しています。

コンピューター、AI 技術、気象観測技術などの発展により「勘」や「経験」が無力であるかのような潮流ですが、人間も基本的には動物です。風を感じて、雲を見て天気を予測する能力があるはずなのです。これが「自然」。しかし今は風を感じることも、雲をみることもなくスマホで天気を観る時代。「自然」と話さなくなった「不自然」。経験や自然から学んできたことから「自分の身を守る」ために「予測する」ことを放棄しています。わたしたちは電気と電波がなければ自分を守ることをできなくなってしまっています。

災害時、電気も電波もなくなったら私たちはどう身を守るのでしょうか。この先、わたしたちは「不自然」に生きている代償を払うことになるのではないのでしょうか。季節風の方向、気温変化、寒暖差、気圧、降雨量の変化など「自然」を自分の体で感じる能力が衰えわたしたち自身が「不自然」なものになっています。私たち人間はこれまでの歴史の中で同じ過ちを幾度もくり返し、学んできたはず？ その経験は「ムダ」なものではないはずなのに、全てを「なかったこと」にして技術に頼り過ぎている（「不自然」）のでないかということです。

大切なことは、わたしたちもまた「自然」の一部であるということをおぼえてはいけないということです。自然の中に現れた「不自然」な壁が私たちに齎す「効能」と「影響」を私たちは未来までも検証し続ける必要があります。無機質な灰色の壁が自然に溶け込むことがないことを認識し、私たちは「生活」「防災」「福祉」「安全」「環境」をしっかりと考えていかなければならないと思っています。

■防潮堤と防災集団移転と防災意識の変化

海岸線に築かれた防潮堤。山を切り開いて造成された防災集団移転地。高いマンション型の住まい。ひとつひとつが安全な生活のために人間が考えて作り出したモノです。高い場所にある防災集団移転地での生活。

地域の急速な高齢化は地域の防災意識の低下に直結しています。「震災前は海岸に近いところに住んでいたから食料も水も防災品も備えていたけど、震災後の今は高いところに住んでいるから備えていない」との声も聞かれます。東日本大震災のその時までみんなが「防災品」を備え避難訓練をしていた比較的防災力の高い地域だったはずなのに…高台移転や防潮堤の設置が防災意識まで変えてしまうものなのか？ 備え力の減退を丁寧



に聞いていくと「高いところに住んでいるから」も一因ですが、「備えていたものがあの日全て流された」という現実がみえてきます。つまり多くの方は自宅ではない場所で被災したということです。備えることの大切さがイコール「防災」。そんな価値観ではなくなったのが喪失体験をした人たちの現実なのです。

地域は東日本大震災から12年が過ぎ、急速な高齢化と地域力の減退に直面しています。地域力の減退は「福祉力」「防災力」の減退です。わたしたちが直面している課題は今後日本国内の多くの地域が直面する問題です。防災意識の低下は、共助が難しくなる地域環境の中で「いのちを守る」ことの難しさにつながっています。大きなリスクです。「避難」する。「自分事」で考える。「防災」は誰かに与えられるものではなく全てが自分事でなければ成立しないことです。そのために、わたしたちの地域で取り組んでいること。それは地域福祉の目線で考える地区防災。ムリとムダのない防災です。

■地域福祉の目線と生活課題



著しい高齢化、地縁と血縁で築かれていた関係の崩壊も地域力の減退につながっています。今後、地域の中で互いを支え合うことが難しくなっていくことが予測されます。

例えば、身近な地域福祉の例で考えると。高齢者や独居者のごみ出しの問題があります。ゴミステーションまで距離がある場所に居住している高齢者はゴミ出しをすることさえ難しいのが現実です。

そんな生活課題を地域で支えることはできるのか？ 私が地域福祉の目線で防災を考えるきっかけでした。「誰かのゴミを出してあげる」こと。簡単そうで頼む人にも頼

まれる人にも抵抗が生じることです。ゴミにはたくさんのプライバシーが含まれています。プライバシーに配慮しながらお互いの抵抗を減らしゴミ出しを手伝う方法はあるのかを考えました。国内の事例を調べてみると高齢者宅からゴミステーションまで通学途中の中学生がゴミを持っていっているという地域もありました。「この地域ではできないなあ～、いや子どもたちにそんなことをさせたくない」というのが私の気持ちです。その理由は、大人が抵抗のあること、感染症のリスクのあることを子どもたちにさせたくないという理由です。いつかは考えなければならないこと…福祉目線の地域づくりをしていくために必要なことは？ この頃の地域の中には「妬み」「僻み」「嫉み」が渦をまいていました。

■地域福祉の目線の地区防災計画づくり

震災から2年後。東日本大震災で被災した人の多くが、地域から離れた仮設住宅で、避難生活を余儀なくされていました。生活再建途上。地域に戻るのか別の場所で生活を始めるのかすら決まらない状況でした。反面、海から1分も要しない地域の高台に住まいが残った人たちは震災後も生活を続けていました。当時の自治会長と地域について話していた時「今災害が起こったら地域を支えることはできるのか？」という問題が提起されました。まずは現状を調査してみることが必要。そしてこれからの地域人口を予測し対策することが必要。

その日から、地域に残って生活している人たちの生活状況、就労状況などを確認してまわりました。その結果から出た数字。地域の日中高齢化率は97%。日中災害が起こったらどんな避難行動をする必要があるのか？ 地域で支え合うことができるのか？ そのためには何をすべきかを考えることになりました。

東日本大震災を経て、まだ生活再建すらままならず疲弊した気持ちの人たちに「地域づくり」や「防災」を話すのは自分自身にも抵抗がありました。「まずは生活再建」そんな言葉が予測できたからです。それでも地域を守るための取組を進めていかなければ大切ないのちは守れない…調査結果という明確なエビデンスを示せば話を聞いてもらえる？

調査は防災集団移転前の地域課題、未来像から季節風、過去の災害、個別の問題調査、家屋調査まで多岐にわたって行い、高齢化地域、大震災時の地域の発生疾病記録などから地域の人たちのいのちを守るための地区防災計画を作成することになりました。

■誰かの負担が大きくなるように「ムリとムダ」の軽減を

ライフスタイルの多様化などにより地域組織の維持が難しくなっていることを踏まえ、自治会全体の負担の増加をさせず、「ムリとムダ」を軽減することで地域組織が持続できる地域づくりを進めています。



コンセプトは、発災時に「いのち」を守るのみ。そして守られたいいのちが守られ続けることのみ。「地域福祉目線の地区防災計画」の内容は1年ごと5項目のみの計画。

- ムリな行動によるリスクをコントロールすること
- 情報を正確に把握し早急な搬送がされること
- 地域の中で協力しあうことでムダな備蓄をしないこと
- 災害発生が予測される場合の早急な避難行動
- 行政との連携

ムリをする防災は長くは続かない。誰かの負担になれば担い手が育たない。防災は誰かがすることではなく「自分事」だから大切なことは自分でできるかぎり管理する。

個人情報管理と個人の状況を正確に把握できるように地域の全ての住民に対し「避難支援カード」を作成・配布しています。このカードは、被災者の避難を支援する意味と住民の緊急時の対応、搬送車や医療者のリスクのコントロールの意味があります。羞恥心に配慮し「パンツのサイズ」を記載してもらう欄を設けているのが特徴で各家庭での保管と避難時に持参することを呼びかけています。カードの自己管理は誰かが個人情報の管理を行うことの負担の軽減と個人情報の漏洩リスクへの備え。緊急搬送時にも有効にカードの機能が働くことを期待して実行しています。

■ 誰が地域を担うのか

わたしたちの地域は「人」が中心の地域づくりです。自治会＝爺会ではない。多様性を認め合うことができる地域が大切だと考え、誰かのやりたいを妨げないことを大切にしています。今地域の若者たちは行政に頼らず、自分たちの地域を守るための避難誘導看板の設置に向けた活動をしています。デザインも設計も予算の獲得も若者たちが進めています。女性たちは秋に文化祭を行うための準備をしています。子どもたちと若者たちがコラボレーションして「なつまつり」の準備をすすめてもいます。誰かが決めたトップダウン型の地域づくりから、みんなで考えるボトムアップ型の地域づくりへシフトしていくための取組をすすめています。

■ 未来へ

わたしたちは「未曾有の災害」を経験しました。災害はわたしたちの全てを変えました。住環境も…人間関係も…仕事も…風景も…環境も…絶望的な災害の翌朝…太陽は何事なかったかの様に上り、津波がひいた後の地面には無数の足跡が照らし出されていました。その足跡を見た時…人間の逞しさと強さを感じました。絶望的な風景の中で「生きよう…」と心に誓いました。たくさんのしんどいを乗り越えて今があります。

みんながあの日乗り越えた同士。「ひとりひとりが大切にされ地域で最後まで生きられる」地域福祉の目線のある、いのちが大切にされる地域づくりをゆっくりゆっくり確実に未来へすすめます。

大浦自治会 地区防災計画 (2020~2023年) ..

目標年	計画内容	詳細	評価
2020年	○地域調査 ○スフィア基準に沿った計画作成 ○地区防災計画づくり ○気仙沼市との連携 ○避難者支援環境の構築	○人口動態、地域内災害リスク調査、環境調査 ○人権に配慮し、地域福祉の目線で計画を作成する ○避難所運営、子どもの防災教育環境づくり ○気仙沼市と連携し、大浦自治会地区防災計画づくりを進める ○避難者支援カードの作成、配布 ■気仙沼市と共同で室崎先生による講演会の開催	○環境調査 A ○作成 A ○避難訓練の回数 B ○気仙沼市がいつかす B ○カードの配布済 A ○開催 PR7 A
2021年	○地域調査 ○要支援者・配慮者の支援環境構築 ○気仙沼市との連携 ○防災訓練(感染症対策含む) ○人口減少下での防災地域づくり	○地域内災害リスク、環境変化の調査 ○高齢者の防災教育 ○気仙沼市と高齢者地域における地区防災について意見交換 ○避難所運営と感染リスク対策(降雨災害時の避難) ○防災地域づくり(地域福祉目線の防災地域づくり) ■気仙沼市との共同で室崎先生による講演会の開催	○土佐郡村地区の認知 A ○避難訓練時実施 A ○意見交換はできず D ○計画の策定 B ○自治会として方針展開 B ○開催やすらぎ A
2022年	○地域調査 ○避難支援カードの見直し ○気仙沼市との連携 ○地区防災計画の見直し ○人口減少下での防災地域づくり	○地域内災害リスク、環境変化の調査 ○支援カード内容の見直し ○気仙沼市と高齢者地域における地区防災について意見交換 ○高齢者の避難環境の見直し ○防災地域づくり(地域福祉目線の防災地域づくり)	○ ○2021年実施 A ○ ○
2023年	○地域調査 ○地域福祉と地区防災教育 ○気仙沼市との連携 ○防災訓練 ○人口減少下での防災地域づくり	○地域内災害リスク、環境変化の調査 ○高齢者の防災教育 ○気仙沼市と高齢者地域における地区防災について意見交換 ○発災時の役割分担と共助関係の確認 ○防災地域づくり(地域福祉目線の防災地域づくり)	○

- 高齢者地域における地区防災
- 無理をしない (お互いに「ムリ」のない地域福祉の目線で防災地域づくりの継続)
- ムダになっても避難する (無駄になっても早期避難の実行)
- 継続的な防災教育の実施 (環境変化に合わせて継続的に防災教育を実施)

氏名 _____

住所 _____

緊急連絡先 _____

① _____

② _____

③ _____

配慮が必要なこと
かきつけ _____

保健室のコピー等集 (介護保険証のコピーなども入れておくといです)

血液型 _____ 型 RH _____

既往歴 _____

服用薬 _____

アレルギー(薬) _____

アレルギー(食べ物) _____

パンツのサイズ: _____



▼フレンズコーナー

奥村組の ESG/SDGs への取り組み

～働き方改革の推進、ダイバーシティ経営の推進、地域社会との連携～

株式会社奥村組/社長室 経営企画部 企画課長
山下 智



1. 奥村組について

1907年に創業した当社は、『堅実経営』と「誠実施工」を信条に、社会から必要とされ続ける企業として、社業の発展を通じ広く社会に貢献する』という経営理念のもと、土木・建築事業を両輪とする調和のとれた総合建設会社として、人々の快適で安全・安心な暮らしと、持続可能な社会の実現を目指しています。



ホームページ <https://www.okumuragumi.co.jp/>

YouTube https://www.youtube.com/channel/UCmp44F7ppyUhaO7RfCtMt_g

2. SDGs とビジョンを一体的に推進

当社グループは社会の持続的な発展に貢献し、当社グループに関わる全ての人とともに成長し続けたいという思いから、将来のありたい姿を示した「2030年に向けたビジョン」を策定し、その実現を目指して事業活動を推進しています。同ビジョンは、SDGs が目指す「持続的な共生社会の実現」と目的を一つにするものと捉えており、事業活動による価値創造が SDGs への貢献につながるものと考えています。

3. ESG/SDGs に関わる当社グループの課題

当社グループでは、ESG/SDGs 推進委員会において、ESG/SDGs に関連する課題等について審議し、戦略的な取り組みを推進しています。また、働き方改革については、専門委員会として、働き方改革推進委員会を設置し、横断的かつ可及的速やかに取り組みを進めています。

ESG/SDGs に関わるリスクと機会、それらが顕在化した場合のインパクトを分析し、その発生可能性と影響度の2軸で重要度を評価したうえで、課題を抽出しています。抽出した課題の解決に向けた方策を策定し、それを中期経営計画における各部門の施策等に反映することで、事業活動と ESG/SDGs に関わる取り組みを一体的に推進しています。

本稿では、それらの取り組みのうち「働き方改革の推進」、「ダイバーシティ経営の推進」、「地域社会・企業との連携」についての事例をご紹介します。

ESG	SDGs	ESG/SDGsに関わるリスクと機会	リスクと機会が顕在化した場合のインパクト	ESG/SDGsに関わる当社グループの課題
E	11 持続可能な都市とコミュニティ	気候変動にともなう異常気象や地震、台風などによる大規模災害の頻発・激甚化	インフラの破損による生活および産業基盤の劣化、保有資産に対する損害	レジリエントなインフラ整備への貢献
	15 陸域生態系の保護	気候変動にともなう気温上昇や環境に配慮しない開発による自然環境の破壊	生態系の破壊や水源の汚染、企業評価の悪化による受注の減少	環境に配慮した事業の推進
	12 持続可能な消費と生産	気候変動にともなう炭素税(カーボンプライシング)の導入による材料・外注費の高騰	建設コストの増額にともなう収益力の低下	脱炭素化の推進
	13 気候変動に配慮した開発	建設資材に含まれる天然資源の浪費	天然資源の減少にともなう持続可能性の減退	リサイクルによる資源の有効活用
S	8 働きがいと経済成長	危険をともなう労働環境	労働者のモチベーションの低下	安心安全な労働環境
	11 持続可能な都市とコミュニティ	空き家や空き店舗、老朽建物の増加	治安・衛生環境の悪化や建物倒壊による災害、保有不動産の賃貸収入の減少	不動産ストックの有効活用
	5 ジェンダー平等	労働環境における多様性の欠如	女性をはじめとする多様な人材の流出、雇用機会の損失	ダイバーシティ経営の推進
E-S	9 産業とインフラの持続可能な開発	気候変動にともなう気温上昇による労働環境の悪化	熱中症リスクの増大、労働生産性の低下にともなう建設コストの増額	機械化・省力化・効率化の推進
E	13 気候変動に配慮した開発	気候変動への対策となる建築物の省エネルギー化需要の増加	建築物の省エネルギー化の進展	建築物の省エネルギー設計
	13 気候変動に配慮した開発	気候変動への対策となるクリーンエネルギー需要の高まり	CO2排出量の少ない発電方式の普及	再生可能エネルギー事業の推進
S	9 産業とインフラの持続可能な開発	ICTの発展と建設技術への応用	ICTによる建設技術の向上	ICTによる技術力と生産性の向上
	8 働きがいと経済成長	業務効率化による長時間労働の削減	建設業の魅力の向上と従業員の健康増進	働き方改革の推進
S-G	8 働きがいと経済成長	働き方の多様化と雇用流動化の進行	多様な働き方の実現	ディーセントワークの推進
	9 産業とインフラの持続可能な開発	高品質インフラの需要の高まり	長寿命なインフラの整備	施工品質の確保・高度化
	17 持続可能なパートナーシップ	地域社会・企業との連携の促進	地域社会・企業とのパートナーシップによるシナジーの発揮	地域社会・企業との連携

ESG/SDGs に関わる当社グループの課題

4. 働き方改革・ダイバーシティ経営の推進

「働き方改革の推進」、「ダイバーシティ経営の推進」の取り組みは、SDGsの「目標 5.ジェンダー平等を実現しよう」、「目標 8.働きがいも 経済成長も」の達成への貢献につながると考えています。

働き方改革の推進については、すべての社員のワークライフバランスの実現を図るべく、新たな働き方改革アクションプランにおいて「なせば成る！働き方改革！」をスローガンに、全社一丸で取り組んでいます。ダイバーシティ経営の推進については、「女性の活躍推進」や「仕事と家庭の両立支援」などに取り組んでいます。女性の活躍推進では、日本建設業連合会が建設現場で働く女性の活躍を後押しする取り組みとして展開している「けんせつ小町工事チーム」に登録し、女性が働きやすい職場環境の整備を進めています。また、当社は、女性の活躍促進において優良な企業として厚生労働省が認定する「えるぼし」の最高位である3段階目を取得しています。仕事と家庭の両立支援では、2022年10月に施行された改正育児・介護休業法を受け、「男性社員育児休業取得率100%」を掲げ、育休啓発動画やポスター、ハンドブックの作成を行い、全社へ展開のうえ制度の浸透を図っています。



けんせつ小町工事チーム



男性育休の啓発ポスター

5. 地域社会・企業との連携

「地域社会・企業との連携」の取り組みは、SDGsの「目標 17.パートナーシップで目標を達成しよう」の達成への貢献につながると考えています。

①大阪国際女子マラソンへの協賛

2023年1月29日に開催された「第42回大阪国際女子マラソン」に協賛しました。レースにかかる選手たちの姿と、当社職員がさまざまな人に支えられながら、困難を乗り越え、竣工というゴールに向けて建設の仕事に取り組む姿勢とが重なり共感できたこと、事業を通じた地元・大阪への貢献や女性活躍推進に力を入れていることから、2018年より同マラソンの協賛社として、女性アスリートを応援しています。今後も同マラソンへの協賛活動を通じて、大阪から世界に羽ばたく女性アスリートを応援し続けていきます。



大阪国際女子マラソンへの協賛

②障がい者の自立支援（パラリンアーティストの作品展示）

一般社団法人 障がい者自立推進機構とオフィシャルパートナー契約を締結し、同機構が運営するアート事業「パラリンアート」を通じて障がい者の自立を支援しています。同アートに登録している障がい者アーティスト（パラリンアーティスト）が描いた作品を全国の事業所や建設現場の仮囲いなどに展示しています。パラリンアーティストとご家族を建設現場に招待し、仮囲いに展示している作品を見ていただくとともに、現場見学会を開催しました。今後も、継続して障がい者の社会参加と経済的自立を支援していきます。



パラリンアーティストの作品展示

6. おわりに

「働き方改革の推進」、「ダイバーシティ経営の推進」については、安全で働きがいのある環境を確保し、個性・創造性を大切にせる企業風土を醸成することにより、女性をはじめとする多様な人材が個々の能力を最大限に発揮し、すべての社員が生き生きと活躍できる職場づくりに努めています。また、「地域社会・企業との連携」については、広く社会、地域に貢献する活動を通じて、地域社会・企業との強固なパートナーシップを構築していきます。当社グループは、2030年に向けたビジョンの実現に向けて、今後も ESG/SDGs に関わる取り組みを強化するとともに、持続可能な社会の実現を目指します。

CNCPは、
あなたが参加し、
楽しく議論し、
活動する場です！

お問い合わせは下記まで

特定非営利活動法人
シビルNPO
連携プラット
フォーム

- 登録事務所
〒101-0054
東京都千代田区神田錦町
3丁目13番地7
名古屋ビル本館2階
コム・ブレイン内
- 連絡事務所
〒110-0004
東京都台東区下谷
1丁目11番15号
ソレイユ入谷9F

事務局長 田中努：
cncp.office@gmail.com
ホームページ URL：
<https://npo-cncp.org/>

▼事務局通信

■6月の実績

●第110回経営会議

開催日・場所：6月16日（金）Zoom会議
議題：総会の会場とプログラム／定款変更／理事変更
／CNCPホームページの新たな運営方針／各事業の進
ちよくと予定

■7月の予定

●第111回経営会議

開催日・場所：7月11日（火）Zoom会議
議題：理事会と総会の予定・案内／事業報告案／各事
業の進ちよくと予定

■8月の予定

●令和5年度第1回理事会

開催日・場所：8月22日（火）Zoom会議

■10月の予定

●令和5年度通常総会

開催日・場所：10月3日（火）土木学会講堂

■現在の会員と仲間の数

- 会員：賛助会員30／法人正会員11／個人正会員25
／合計66
- 仲間：サポーター109／フレンズ111／土木と市民
社会をつなぐフォーラム15／インフラパートナー18
／合計253

●CNCPの活動には下記の賛助会員の皆さまのご支援をいた
だしています（50音順・株式会社等省略）。

アイ・エス・エス／アイセイ／安藤・間／エイト日本技術開発
／エヌシーイー／奥村組／オリエンタルコンサルタンツ／ガイ
アート／熊谷組／建設技術研究所／五洋建設／佐藤工業／シン
ワ技研コンサルタント／スバル興業／セリオス／第一復建／竹
中土木／鉄建建設／東亜建設工業／東急建設／ドーコン／飛島
建設／土木学会／西松建設／日本工営／パシフィックコンサル
タンツ／フジタ／復建エンジニアリング／復建調査設計／前田
建設工業（以上30社）



土木と市民社会を
つなぐフォーラム



インフラパートナー
JSCE 土木学会